

3. 本園の現況（施設の概要）

3-1 現況及び施設配置

以下に本園の現況の平面図（図2-39）と、主な施設の配置（図2-40）を示す。

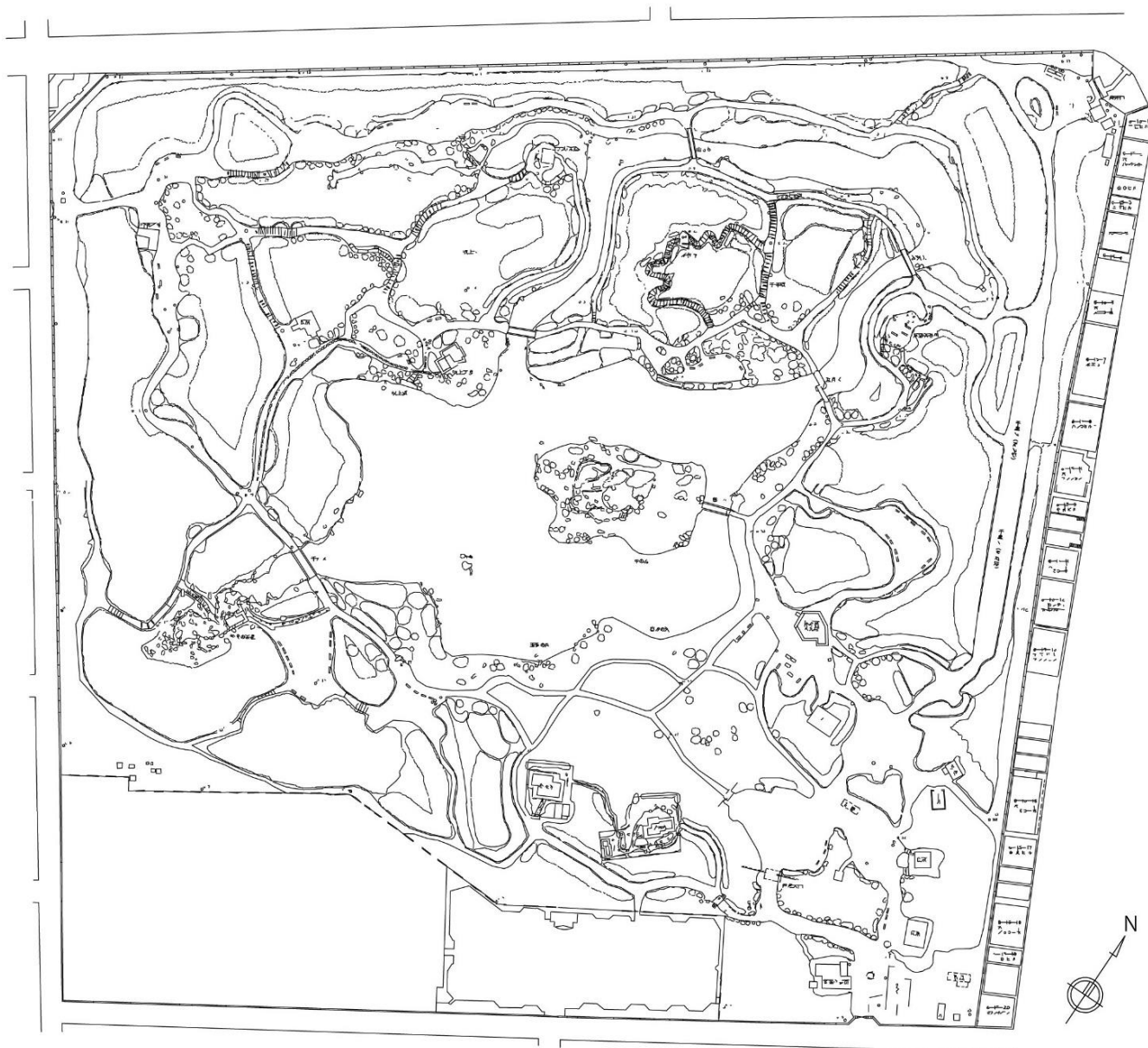
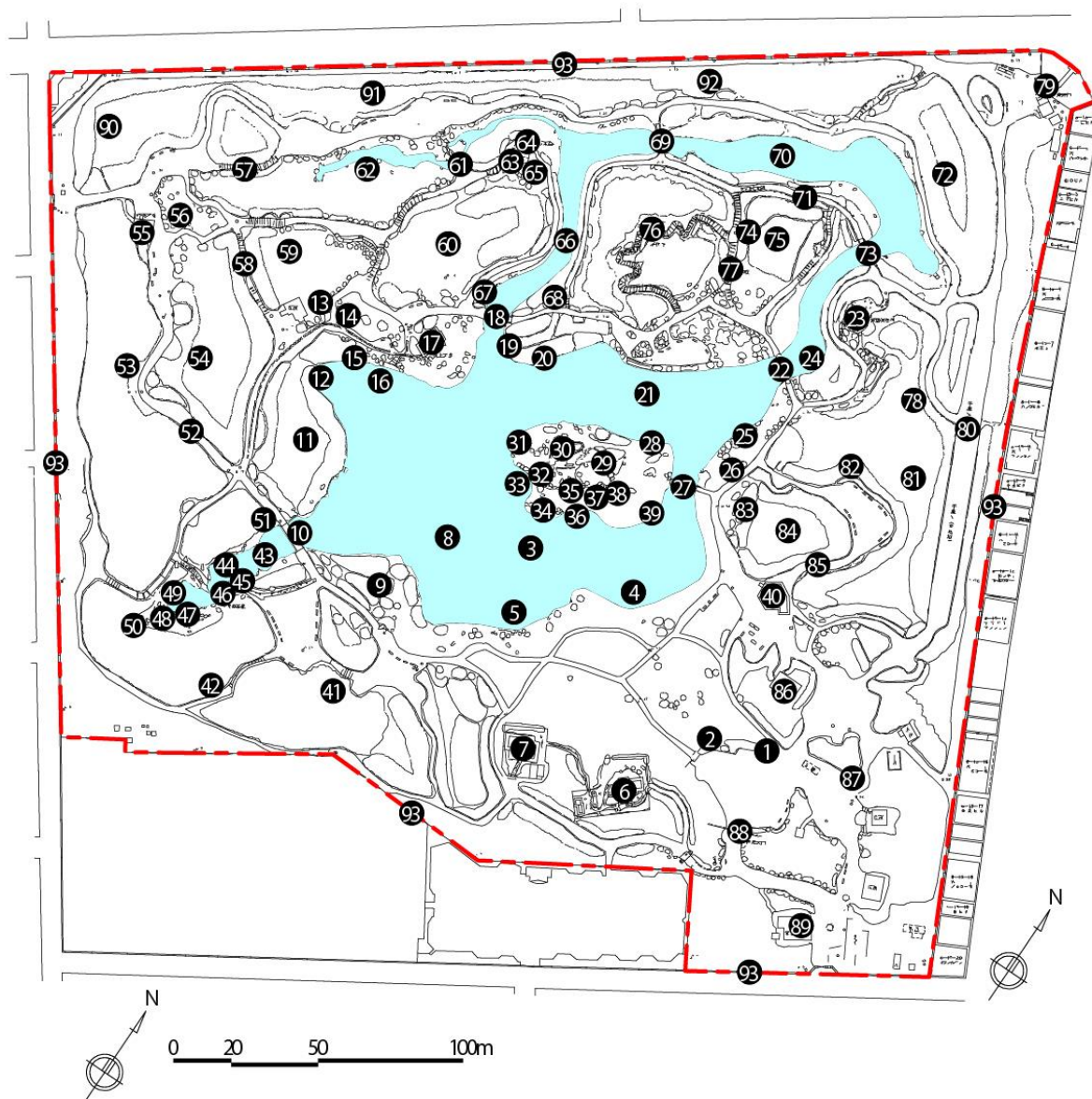


図2-39 「六義園施設測量 施設平面図」平成11（1999）年 東京都建設局

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）



- | | | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|---------|---------|
| 1 しだれ桜 | 17 吹上茶屋 | 33 臥龍石 | 49 朝陽岩 | 65 霞渟坂 | 81 名古屋 |
| 2 新脩六義園碑 | 18 白鷗橋 | 34 片男波・背松 | 50 紀路遠山 | 66 不知汐路 | 82 新玉松跡 |
| 3 和歌の浦 | 19 桜波石跡 | 35 玉笹 | 51 覧古石 | 67 浪花石 | 83 言問松跡 |
| 4 出汐湊 | 20 能見石跡 | 36 浮寶石 | 52 尋芳経 | 68 布引松 | 84 藐姑射山 |
| 5 玉藻磯 | 21 紀川 | 37 堅磐 | 53 下折峯 | 69 山陰橋 | 85 兼言道 |
| 6 宜春亭 | 22 渡月橋 | 38 常磐 | 54 衣手岡 | 70 剡溪流 | 86 土蔵 |
| 7 心泉亭 | 23 芦邊茶屋跡 | 39 詞華石 | 55 吟花亭跡 | 71 蛛道 | 87 遊藝門跡 |
| 8 蓬萊島 | 24 宿月湾 | 40 休憩所・売店 | 56 峯花園 | 72 軒端山 | 88 内庭大門 |
| 9 指南岡・妹松跡 | 25 芦邊 | 41 臈の岡 | 57 篠下道 | 73 藤浪橋 | 89 管理所 |
| 10 千鳥橋 | 26 春日灯籠 | 42 白鳥岡跡 | 58 藻塩木道 | 74 擲筆松跡 | 90 掛雲峯 |
| 11 時雨岡 | 27 仙禽橋 | 43 紀川上 | 59 木枯峯 | 75 老ヶ峯 | 91 花垣山 |
| 12 霞入江 | 28 鶴鶴石 | 44 拾玉渚 | 60 吹上峯 | 76 藤代峠 | 92 藤里跡 |
| 13 吹上小野 | 29 背山 | 45 亀浮橋跡 | 61 芙蓉橋 | 77 千年坂 | 93 外周堀 |
| 14 雲香梅跡 | 30 妹山 | 46 滝見茶屋 | 62 水香江 | 78 過勝峯 | |
| 15 吹上松 | 31 裾野梅跡 | 47 水分石 | 63 座禅石 | 79 染井門 | |
| 16 吹上浜 | 32 詠和歌石 | 48 枕流洞 | 64 つつじ茶屋 | 80 千里場 | |

図2-40 主な施設の位置図

3-2 主な視点場からの景観

本園における主な視点場からの園内の景観を図2-41に示す。

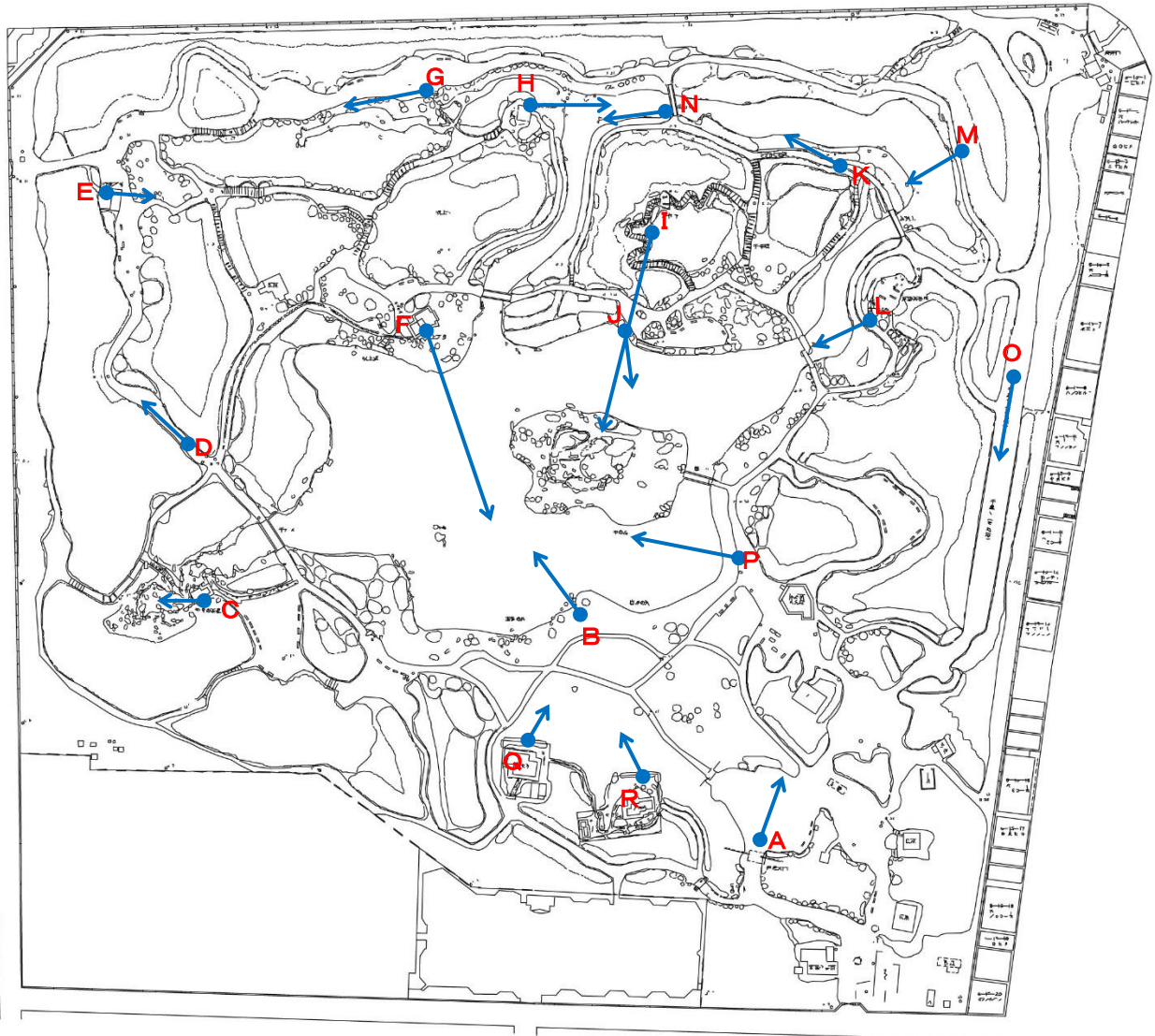


図2-41 主な視点場

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| A : 内庭大門からのしだれ桜の景観 | J : 紀川の景観 |
| B : 和歌の浦の景観 | K : 蛛道からの剱溪流の景観 |
| C : 滝見茶屋からの枕流洞・紀川上の景観 | L : 芦邊茶屋跡から宿月湾・渡月橋の景観 |
| D : 尋芳経からの山中の景観 | M : 剱溪流の景観 |
| E : 吟花亭跡からのつつじ・峯花園の景観 | N : 山陰橋からのつつじ茶屋の景観 |
| F : 吹上茶屋からの和歌の浦の景観 | O : 千里場の景観 |
| G : 水香江の景観 | P : 中の島の景観 |
| H : つつじ茶屋からの山陰橋の景観 | Q : 心泉亭からの景観 |
| I : 藤代峠からの紀川・中の島の景観 | R : 宜春亭からの景観 |

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）



図 2-42 内庭大門からのしだれ桜の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-43 和歌の浦の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-44 滝見茶屋からの枕流洞・紀川上の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-45 尋芳経からの山中の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-46 吟花亭跡からのつつじ・峯花園の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-47 吹上茶屋からの和歌の浦の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-48 水香江の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-49 つつじ茶屋からの山陰橋の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-50 藤代峠からの紀川・中の島の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-51 紀川の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-52 蛛道からの剡溪流の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-53 芦邊茶屋跡から宿月湾・渡月橋の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-54 剡溪流の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-55 山陰橋からのつつじ茶屋の景観（平成 29 年 12 月 7 日）

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）



図 2-56 千里場の景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-57 中の島の景観（平成 29 年 12 月 7 日）

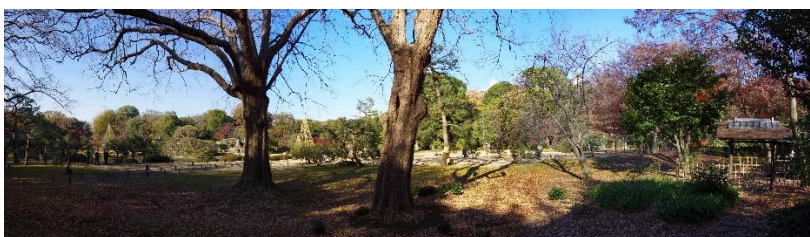


図 2-58 心泉亭からの景観（平成 29 年 12 月 7 日）



図 2-59 宜春亭からの景観（平成 29 年 12 月 7 日）

3-3 本園及び周辺に関わる法規制等

本園及び周辺に関わる法規制は、以下の通りである。

(1) 都市計画法（昭和 43 年 6 月 15 日法律第 100 号）

本園及び周辺の都市計画の決定内容は以下の通りである（図 2-60）。

都市計画公園：東京都市計画公園第 8・5・9 号六義園

計画決定面積：10.08ha、種別：特殊公園（歴史）

用途地域：第一種低層住居専用地域、建蔽率 60%、容積率 150%、
第一種高度地区、高さ限度 10m

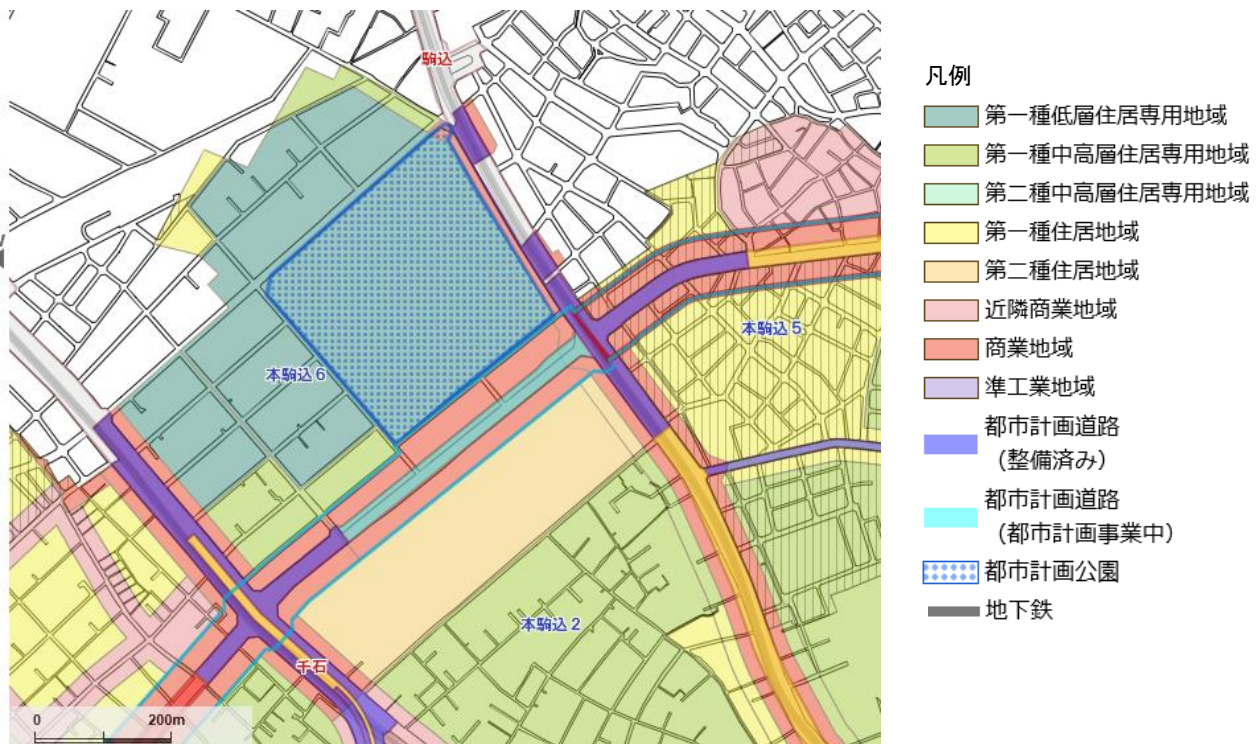


図 2-60 六義園及び周辺地域の都市計画
「文京区都市計画図（地域地区等）」（文京区 2016 年 3 月）をもとに作成

(2) 都市公園法（昭和 31 年 4 月 20 日法律第 79 号）、東京都立公園条例（昭和 31 年 12 月 27 日条例第 107 号）

本園は、昭和 13 年 10 月 16 日に六義園として公開され、現在は、東京都立公園条例により設置、管理されている。

六義園 開園面積：87,809.41 m² 種別：特殊公園（歴史）

土地所有：東京都

なお、本園南側の都市計画公園の区域には、昭和 50 年及び昭和 52 年に、東京都より移管された文京区立六義公園が設置されている。

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

（3）景観法（平成 16 年 6 月 18 日法律第 110 号、平成 30 年 5 月改正）・東京都景観条例（平成 18 年 10 月 12 日条例第 136 号）

本園周辺は平成 20（2008）年、小石川後樂園、旧古河庭園、旧岩崎邸庭園と共に、景観法に基づく景観計画による「文化財庭園等景観形成特別地区」に指定されている（図 2－61 赤線）。

「文化財庭園等景観形成特別地区」では、各庭園の外周線からおおむね 100m から 300m までの範囲について、景観形成の方針を定め、一定の規模以上の建築物等に対する景観誘導や屋外広告物の表示を規制し、届出により庭園の内部からの眺望景観を保全している。平成 27（2015）年 5 月には文京区が景観法に基づく景観行政団体となり、同年 10 月には文京区景観計画を策定し、届出等は文京区において行っている。

また、総合設計など、都市開発諸制度を適用して計画される大規模な建築物等に対し、文化財庭園等の眺望の保全に関する景観誘導を行うため、庭園外周からおおむね 1 km までの範囲を「大規模建築物等の建築等に係る景観誘導区域」とし、景観形成基準により計画段階での東京都への事前協議を行っている（図 2－61 青線）。

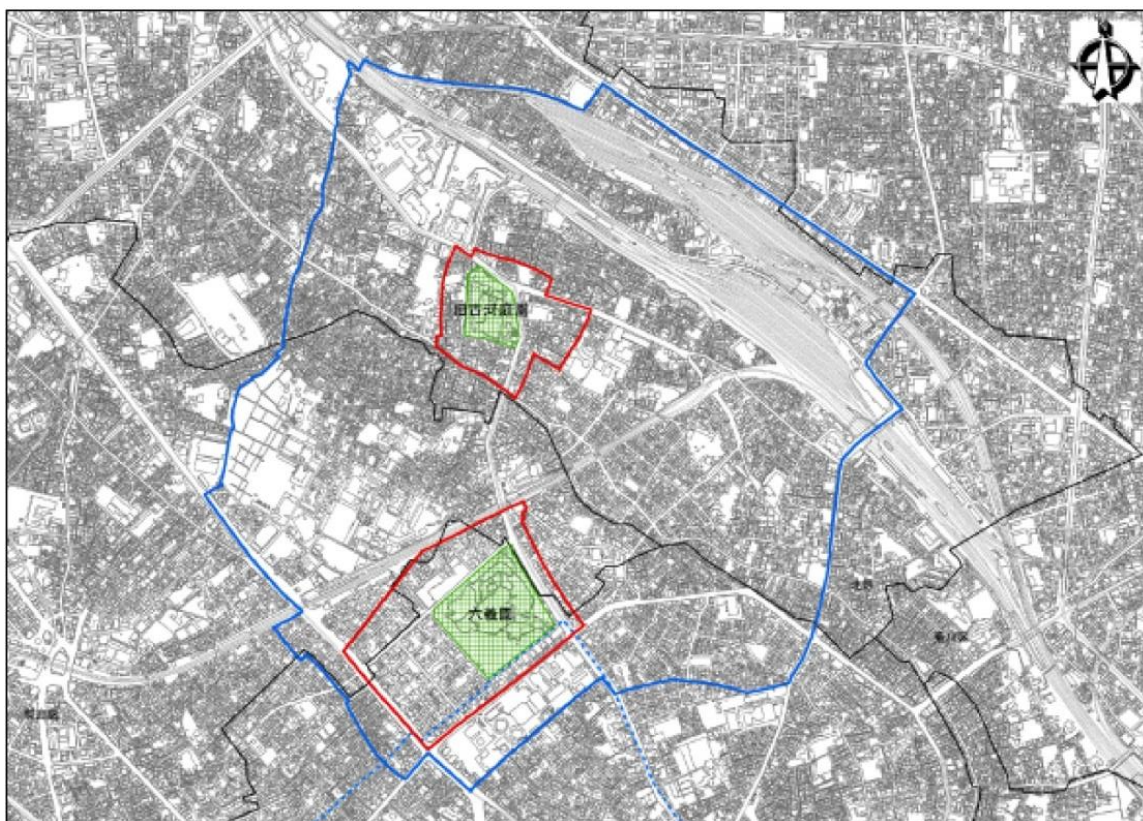
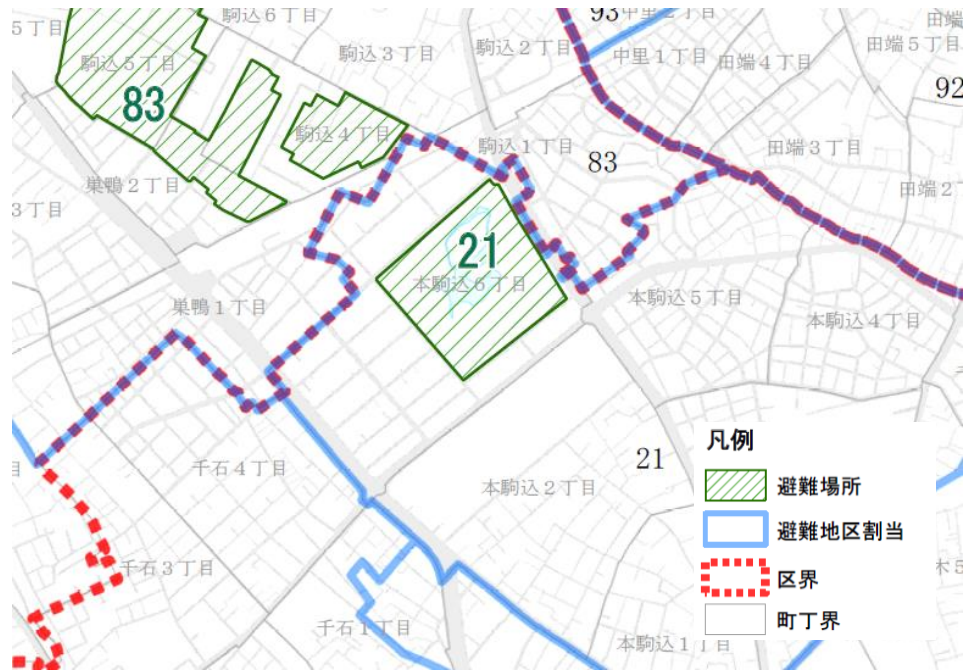


図 2－61 六義園・旧古河庭園周辺の景観誘導区域
「東京都景観計画」（2007 年 3 月策定、2016 年 8 月改正）東京都都市整備局

(4) 東京都震災対策条例（平成 12 年 12 月 22 日 条例第 202 号）・災害対策基本法（昭和 36 年 11 月 15 日法律第 223 号、平成 25 年 6 月改正）

東京都震災対策条例に基づく避難場所ならびに災害対策基本法に基づく緊急避難場所（文京区指定）として、本園を含む「六義園」が指定されている（図 2－62）。



番号	避難場所名称	所在地	区域面積 (㎡)	避難有効面積 (㎡)	地区割当			避難計画 人口（人）	一人当たり 避難有効面積 (㎡/人)	最遠距離 (km)
					区	町丁	町丁数			
21	六義園	文京区本駒込	100,865	52,655	文京区	千駄木 4丁目、5丁目の一部、本駒込 1～6丁目	8	29,723	1.77	1.2

図 2－62 「六義園」避難場所
震災時火災による避難場所及び避難道路の指定（平成 30 年 6 月改訂）東京都都市整備局

4. 本園の本質的価値

4-1 本園の本質的価値の明示

（1）柳澤吉保が築造した六義園八十八境に由来する海辺、山辺の景が鑑賞できる回遊式庭園

本園は、江戸時代に柳澤吉保が築造した六義園がはじまりであり、大泉水と中島、大小の築山など変化に富んだ地形の中に、和歌に詠まれた景が配された回遊式庭園である。

庭は大泉水を中心とした海辺と、それを囲む山辺に見立てた景観で構成されている。

大泉水には出汐湊、玉藻磯、吹上浜、宿月湾、臥龍石、蓬莱島などが設けられ、変化に富んだ海辺の景をなし、妹山、背山の築かれた中島が園景の要になっている。

池の周囲には、いくつもの築山が築かれ、その中に配された藤代峠や老ヶ峰、吹上峯、^{ささかにの}蜘蛛道、^{みち}紀川上、水分石、朝陽岩などにより、山辺の景が表現されている。

江戸期や明治初期には庭園が荒廃した時期もあったが、その都度修復、復興がなされ、現在も六義園八十八境と呼ばれた景の多くが継承されている。

本園の周辺は宅地等の開発が進んでいるものの、高層建築物が少ないことから、現在でも園内から庭園越しに大空を望むことができる。園内で最も標高が高い藤代峠からは、大泉水を中心とした庭園を俯瞰することができ、足元のツツジが一面に咲き誇る春や、秋の紅葉の頃には見事なパノラマ景観が楽しめる。

（2）江戸大名庭園を岩崎家が整備した後、東京市へと継承され、発展してきた公共庭園

本園は、江戸時代に柳澤吉保が築造し、明治維新の版籍奉還に伴い、政府に上地されるまでの間、柳澤家の庭園として、その名声とともに受け継がれてきた。

明治維新の際、江戸の大名屋敷に付随する庭園の多くが失われたが、本園を所有した岩崎家では、千川上水を復興し、その水を本園に引水することで池泉を復旧したほか、新たな庭石や樹木を用いて景趣を整え、また、庭の各所に茶屋を整備するなど、大名庭園を生かした整備を進めた。

その後、「庭園を広く一般に公開し公衆とともに楽しむことが岩崎家の道である」とした岩崎久彌により、市民の休養観賞等のための公園とすべく、昭和13（1938）年に、本園は東京市に寄附された。このことは、都市における緑の重要性とともに、歴史的価値の高い庭園の保存を訴えていた、当時の東京市側の強い思いを汲んだ画期的な出来事であった。

このように江戸大名庭園に端を発し、岩崎家による整備を経た後、寄附により東京市の庭園となり、所有者の変遷を経ながらも、江戸大名庭園の景観やそれを生かした岩崎家の庭園建築等が現在に継承されており、その歴史的背景や意義を伝える重要な庭園である。

（3）庭園の景を活かしたもてなしの場の充実を図り、様々な来園者を迎えてきた饗応の庭園

柳澤吉保は、親交のあった公家らと園内で歌を詠み、吟花亭や芦辺亭、壺中天といった茶室で、酒盃により歓待した。また、桂昌院の立寄りの際には、園内に別途店を設けるなどの趣向を凝らしたもてなしをするなど、饗応の場として大いに活用した。また、3代信鴻は、当時流行していた菊花壇を設け、市井の民にも観賞させていた。

明治に入り、本園を手に入れた岩崎家では、政府や軍人、華族、会社関係者など多岐にわたる人々

Ⅱ 六義園の歴史・本質的価値

を度々招き、祝宴を開くなど、本園を社交の場として用いており、園景とともに園内各所に設けられた熱海の茶屋、桃の茶屋、芦邊の茶屋、瀧見茶屋、つつじの茶屋などの瀟洒な茶屋は広い庭園の中で来園者をもてなす施設として大いに活用された。

これらの茶屋は戦災により失われたが、熱海の茶屋（現在の吹上茶屋）や桃の茶屋（現在の心泉亭）、瀧見茶屋は東京都により再建され、現在も庭を觀賞しながら飲食を楽しんだり、休憩したりする場として来園者を迎えている。また、東京都では、茶室として宜春亭を移築し、茶道のほか華道や香道などの利用に供している。

本園はいつの時代も、訪れる人をもてなし、楽しませる視点での施設の充実が図られ、利用に供されてきた、もてなしの庭園である。

4-2 庭園の価値を構成する要素

平成22年度改定の「東京都における文化財庭園の保存管理計画」（以下、保存管理計画という。）では、本園の特色に基づき、図2-63のように、4つの景観ゾーン及びA～Qの地区に分けた。

本園の「本質的価値を構成する要素」を景観ゾーンに分けて表2-4に整理した。また、本園の維持管理や運営上必要である要素を「本質的価値を構成する要素以外の要素」として、表2-5に整理した。



- ①中の島を中心とする大泉水とその周辺の海辺の景観ゾーン
- ②大泉水を囲む山辺の景観ゾーン
- ③正門及び染井門周辺の景観ゾーン
- ④外周緩衝植栽ゾーン

図2-63 景観ゾーン及び地区区分図

Ⅱ 六義園の歴史・本質的価値

表 2-4 本園の本質的価値を構成する要素

ゾーン	要素
① 中の島を中心とする大泉水とその周辺の海辺の景観ゾーン	地形: 中の島、妹山、背山、和歌の浦、紀川、指南岡、時雨岡、吹上小野
	護岸・石組: 和歌の浦護岸、出汐湊、玉藻磯、蓬萊島、霞入江、吹上浜、桜波石、能見石、紀川護岸、宿月湾、芦邊、鶴鴿石、詠和歌石、臥龍石、片男波、玉笹、堅磐、常磐、詞華石、浮宝石
	植栽: しだれ桜、妹松、雲香梅、吹上松、裾野梅、背松、 <u>風雅松</u> 、 <u>古風松</u>
	建造物・石造物: 新脩六義園碑、千鳥橋、吹上茶屋、白鷗橋、渡月橋、春日灯籠、仙禽橋、宜春亭、心泉亭
	遺構: 芦邊茶屋跡
② 大泉水を囲む山辺の景観ゾーン	地形・道: 臈の岡、紀川上、紀路遠山、尋芳経、下折峯、衣手岡、篠下道、霞淳坂、藻塩木道、木枯峯、吹上峯、水香江、不知汐路、剡溪流、蛛道、軒端山、老ヶ峯、藤代峠、 <u>心泉</u> 、萬世岡
	護岸・石組・石段: 拾玉渚、紀川上護岸、水分石、枕流洞、朝陽岩、覽古石、座禅石、不知汐路護岸、浪花石、千年坂、藤代峠石段、 <u>見山石</u> 、 <u>詞源石</u>
	植栽: 峯花園、布引松、 <u>心種松</u> 、 <u>詞林松</u> 、 <u>掛名松</u> 、 <u>和歌松原</u> 、 <u>擲筆松</u> 、蛛道のクマザサ、つつじ、紅葉
	建造物・石造物: 滝見茶屋、芙蓉橋、つつじ茶屋、山陰橋、藤浪橋、 <u>亀浮橋</u>
	遺構: 白鳥関跡、吟花亭跡
③ 正門及び染井門周辺の景観ゾーン	地形: 過勝峯、千里場、名古山、藐姑射山、兼言道、 <u>夕旦岡</u>
	植栽: <u>新玉松</u> 、 <u>言問松</u>
	建造物・石造物: 内庭大門、土蔵
	遺構: 遊藝門跡
④ 外周緩衝植栽ゾーン	地形: 掛雲峯、花垣山
	遺構: 藤里跡

※六義園八十八境のうち、下線は現存しないものを示す。

表 2-5 本園の本質的価値を構成する要素以外の要素

分類	要素
植栽	本質的価値を構成する植栽（表 2-4）以外の植栽
建造物、構造物、石造物	本質的価値を構成する要素（表 2-4）以外の石碑
公開・活用施設	掲示板、案内板、解説板
休養施設	ベンチ、休憩所
便益施設	便所、水飲場、売店
管理施設	給排水管、電気通信管、ロープ柵、給水ポンプ、ごみ箱、竹柵、管理用門扉、正門、染井門、分電盤、循環施設、スピーカー柱、西門
管理運営のための建物	管理所、倉庫、詰所、資材置場、作業小屋、集積所

1 中の島を中心とする大泉水とその周辺の海辺の景観ゾーン

1) しだれ桜

本園の正門から入り、内庭大門をくぐった広場があり、その大きさは高さ約15メートル、幅は約20メートルに及ぶ。品種は「エドヒガン」の中でも枝が柔らかく、垂れながら成長するもので、薄紅色の花が満開になると、あたかも水しぶきを上げて流れ落ちる滝のような姿を楽しむことができる。

昭和30年代に植樹され、樹齢70年を超えるこの桜は、「六義園のしだれ桜」として親しまれ、春の開花時期には多くの来園者が訪れるなど、本園のシンボルツリーとなっている。



図2-64 しだれ桜
(平成29年7月17日)

2) 新脩六義園碑（しんしゅうりくぎえんひ）

内庭大門をくぐり、更に本園の景観が開ける小さな庭門の手前にある石碑である。

石碑の建立は文化7（1810）年以後と考えられ、表面には吉保の代に霊元上皇より賜った六義園八景が刻まれている。裏面には4代保光により本園の修復の様子が刻まれており、その際、復元できなかった3境の代わりに、新たに3境を補完したことが刻まれている¹⁷⁾。もとは現在の売店付近にあったが^{10) 51)}、明治期の岩崎家による庭園修復の際、現在の位置に移設されたと考えられる²³⁾。



図2-65 新脩六義園碑
(平成29年7月17日)

3) 和歌の浦

本園の中心にある池であり、作庭初期に吉保により築造された^{5) 52)}。万葉集をはじめとする古典和歌に多く登場する、和歌山の「和歌の浦」の歌枕の風景を見立てたものであり⁵³⁾、本園の地割の中心となる最も重要な大泉水である。池泉の中心に妹山、背山などを有する中の島を配している。

現在も作庭当時の図と同じ地割が保たれており、作庭当初の庭園景観を今に伝えている。



図2-66 和歌の浦
(平成29年7月17日)

4) 出汐湊（でしおのみなと）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、和歌の浦の南東側に位置する。六義園記では、「和歌の浦に 月の出汐の さすまゝに よるなくたづの こゑぞさびしき」と詠まれた和歌に基づいているとされる^{5) 53)}。

現在も「出汐湊」と刻まれた石柱が付近に残っており、作庭当時の図絵と同じ地割が保たれている。



図 2-67 出汐湊
(平成 29 年 12 月 7 日)

5) 玉藻磯（たまものいそ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、和歌の浦の南西側に位置する。六義園記では、玉葉和歌集に収録された「和歌の浦に 千々の玉藻を かきつめて 万代までも 君が見んため」と詠まれた和歌に基づいているとされる^{5) 53)}。元は作庭初期の八十八境の一つであった「心泉」の流れが玉藻磯につながっていた。

心泉が廃滅した現在は、護岸のみが残っている。



図 2-68 玉藻磯
(平成 29 年 12 月 7 日)

6) 宜春亭（ぎしゅんてい）

本園の南側に位置する。昭和 38（1963）年 10 月、世田谷区にある私邸「宜雨荘」の用地買収に伴い、敷地内にあった茶室を東京都が買い取り、本園に移築した。この移築は本格的な茶室が本園内になかったため、利用者の要望に応えたものであった。名の由来は私邸の一字「宜」と、宋代の一節「梅は春によろし、秋によろし、雨に風に、いずれも宜しき風情がある」にちなんだものである²⁴⁾。この茶室は京都から数寄屋大工を招聘し、1 年かけて造られたものであり、その使用材料はもとより各所の意匠の繊細さや優雅な構造等に優れた数寄屋建築である⁵⁴⁾。

移築後、屋根の葺替、養垣の改修、待合屋根の改修などが行われ、現在も茶室として多くの利用者に親しまれている。



図 2-69 宜春亭
(平成 29 年 12 月 7 日)

7) 心泉亭（しんせんてい）

本園の南側に位置する。もとは「桃の茶屋」として岩崎家時代に建てられた茅葺屋根の入母屋造りであった。

昭和 20（1945）年に戦災により焼失したが、昭和 25（1950）年に再建され、八十八境の「心泉」跡地付近であることから「心泉亭」と改めた。その後、茅葺屋根の傷みが激しくなり、瓦屋根に変更された²⁴⁾。

現在は集会場として多くの利用者に利用されている。



図 2-70 心泉亭
(平成 29 年 12 月 7 日)

8) 蓬莱島

中の島より南側の池水面にあり、頂に小松がある小島である。詳細は不明であるが、江戸後期の六義園図絵巻と明治期の岩崎氏染井別邸実測図との比較から、岩崎家時代に造られたものであると推定される。

昭和 51（1976）年に暴風雨により、蓬莱島が傾き小松が池に落ちたが、復旧された。その後、平成 23（2011）年に発生した東日本大震災により倒伏したため、平成 25（2013）年に再度修復されている。



図 2-71 蓬莱島
(平成 29 年 12 月 7 日)

9) 指南岡（しるべのおか）

指南岡は作庭初期の六義園八十八境の一つであり、和歌の浦の南西側に位置する。六義園記ではこの景について、新千載和歌集にある和歌「尋行 和歌の浦ぢの 浜千鳥 あとあるかたに 道しるべせよ」をもとに、近傍にある「千鳥橋」と関連する要素であることを記している^{5) 53)}。

現在も「志るへの岡」と刻まれた石柱が付近に残っており、築山としてその名残を見ることができる。



図 2-72 指南岡
(平成 29 年 12 月 7 日)

10) 千鳥橋（ちどりばし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の南側、指南岡付近に位置する。六義園記では「ちどりにかけたる橋なれば」とあり、「指南岡」と関連する要素であることを記している^{5) 53)}。当時の絵図では三段に折れ曲がった橋としてあり、文化 10（1813）年の記録では、長さ5間（約9m）、幅9尺（約2.8m）ばかりの板で造られ、欄干のない橋であったとされる¹⁸⁾。岩崎家時代までには現在ののような形態の橋になったと考えられる⁵⁵⁾。現在は土橋として園内に残っている。



図 2-73 千鳥橋
(平成 29 年 7 月 17 日)

11) 時雨岡（しぐれのおか）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の池の南西側に位置する。六義園記では「時雨ふりおけるならの葉」とあり、近傍の檜と合わせ、和歌の縁語と関連する要素であることを記している⁵⁾⁵³⁾。

文化6（1809）年に柳澤保光により復旧されているが、その後について記された資料は明らかになっておらず、現在は築山としてその名残を見ることができる。



図2-74 時雨岡
(平成29年12月7日)

12) 霞入江（かすみいりえ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の池の西側に位置する。六義園記では、「人とはゞみずとやいはん 玉津嶋 かすみ入江の 春の明ぼの」と詠まれた和歌に基づいているとされ、本園の正面または玉津島方面（新玉松付近）より眺めても霞んでいるように見える入江、と記している^{5) 53)}。

文化10（1813）年の記録では、「かすみの入江」として紀川より北の汀との記載があり¹⁸⁾、その後について記された資料は明らかになっておらず、現在は入江としてその名残を見ることができる。



図2-75 霞入江
(平成29年12月7日)

13) 吹上小野（ふきあげのおの）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側に位置する。六義園記ではその由来について記されていないが、文化10（1813）年の記録では、紀川の北側にある広野とされる¹⁸⁾。

その後について記された資料は明らかになっておらず、現在は吹上茶屋が建ち、付近に大きなツツジ類がある草地となっている。



図2-76 吹上小野
(平成29年12月7日)

14) 吹上松（ふきあげのまつ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側に位置する。六義園記ではその由来について記されていないが、文化10（1813）年の記録では「霞の松」と記され、高さ数十丈（約10m）で半ばより枝が3つに分かれた屈曲の景樹であった¹⁸⁾。

現在の松が当初のものは明らかではないが、「吹あげ乃杵」と刻まれた石柱が付近に残っており、その様子を今に伝えている。



図2-77 吹上松
(平成29年12月7日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

15) 吹上浜（ふきあげのはま）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の池の西側に位置する。六義園記では「*和哥の浦にある名所なり*」とあり^{5) 53)}、文化6（1809）年に柳澤保光により復旧されているが、その後について記された資料は明らかになっていない。

現在もその地割が残り、残された石柱とともにその名残を見ることができる。



図2-78 吹上浜
(平成29年12月7日)

16) 吹上茶屋

本園の池の西側、吹上小野付近に位置する。岩崎家により熱海の別荘にあった茶室を移築したものであり、当初は「熱海ノ茶屋」と呼ばれていた²⁴⁾。

昭和20（1945）年に戦災により倒伏したが、罹災者の一時避難所として復旧した。昭和25（1950）年の本格復旧で「吹上茶屋」と改称し、4月に売店として開業した。昭和31（1956）年に火災により付近の古松とともにほぼ全焼し、昭和34（1959）年に再建した。現在は軽食を提供する喫茶・売店として多くの利用者に利用されている。



図2-79 吹上茶屋
(平成29年12月7日)

17) 白鷗橋（かもめのはし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側に位置する。六義園記では、「*鷗みる 吹上のはまの 塩風に うらさびわたる 冬の夜の月*」と詠まれた和歌に基づいているとされ、「*浦さびわたる*」とも言うべき渡りとある²⁸⁾。

文化年間以後の記録では、長さ5間（約9m）ほどあり¹¹⁾、土橋と記され¹⁰⁾、現在も残るが、改修等の記録は明らかでない。



図2-80 白鷗橋
(平成29年12月7日)

18) 紀川（きのかわ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の中の島から北側の流れである。名にある紀の川は吉野川のこと、紀貫之にゆかりのある要素であり、古代の歌聖で和歌三神の一人である人丸の和歌「*ひとならば 親の思ひぞ 朝もよひ 紀の川づらの 妹と背の山*」に基づいた、和歌の歴史を表す重要な要素である^{5) 53)}。

現在も「紀川」と刻まれた石柱が付近に残っており、作庭当時の図絵と同じ地割が保たれている。



図2-81 紀川
(平成29年12月7日)

19) 渡月橋

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の池側の紀川に架かる橋である。六義園記では、「和哥の浦 蘆辺の田靄の 鳴こゑに 夜わたる月の影ぞさびしき」と詠まれた和歌に基づいているとされる^{5) 53)}。文化 10 (1813) 年の記録では、長さ 5 間 (約 9m) の土橋と記されている¹⁸⁾。

昭和 13 (1938) 年までには現在の石橋の形状となったと見られる⁵⁶⁾ が、詳細は明らかでない。



図 2-82 渡月橋
(平成 29 年 12 月 7 日)

20) 芦邊茶屋跡

本園の北側、紀川付近に位置する。元の茶屋は柳澤吉保時代に、芦邊と名付けられた境の付近に「芦辺亭」としてあったが、岩崎家時代に現在の位置に芦邊茶屋が建てられた。

その後、昭和 13 年までに跡となっていた建物を東京市が再建したが、昭和 20 (1945) 年に戦災により焼失し、現在はその跡として残っている。



図 2-83 芦邊茶屋跡
(平成 29 年 12 月 7 日)

21) 宿月湾 (つきやどるわだ)

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北側の芦邊茶屋跡付近に位置する。六義園記では、「玉津島 やどれる月の影ながら よせくる波の秋の汐かぜ」と詠まれた和歌に基づいているとされる^{5) 53)}。文化 6 (1809) 年に柳澤保光により復旧されているが、その後について記された資料は明らかになっていない。

現在もその地割が残り、その名残を見ることができる。



図 2-84 宿月湾
(平成 29 年 12 月 7 日)

22) 芦邊 (あしべ)

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北東の池側に位置する。六義園記ではその由来について記されていないが、「芦邊」は和歌の浦を題材にした和歌に登場する単語である^{5) 53)}。文化 6 (1809) 年に柳澤保光により復旧されたが、その後について記された資料は明らかになっていない。

現在は石柱とともに、地割として残っている。



図 2-85 芦邊
(平成 29 年 12 月 7 日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

23) 春日灯籠

本園の北東、仙禽橋の袂付近に位置する。柳澤吉保時代の絵巻に登場するが⁵⁷⁾、現在の灯籠は江戸末期のものとされ、豊島御影が使われている²⁴⁾。

明治 38（1905）年及び昭和 13（1938）年頃の写真にもその様子を見ることができる。



図 2-86 春日灯籠
(平成 29 年 12 月 7 日)

24) 仙禽橋（たづのはし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島に架かる橋である。資料によっては「田鶴橋」とも記される。六義園記では「赤人の哥のこゝろをとれり。鶴は、仙家の禽にて、数千年をたもつ目出度物なれば。」とあり⁵⁾、欄干のついた木橋であった⁵⁷⁾。また、「『詠哥石（詠和歌石）』、『片男波』も、ちかし。」とあり、山部赤人の和歌に登場する 2 つの要素との関連を示している⁵⁾⁵³⁾。文化年間以後の記録では「たつの橋」と記され、長さ 4 間（約 7.2m）、ほどの板橋と記されている¹⁰⁾。



図 2-87 仙禽橋
(平成 29 年 12 月 7 日)

現在も石柱とともに残っており、平成 20（2008）年に改修工事が行われた。

25) 鶴鴒石（せきれいいし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島の北側に位置する。六義園記では日本書紀でイザナキ・イザナミノミコトが鶴鴒から夫婦の道を教わったとされる一説と、「『妹背山の道を教る』といふこゝろにて。」とあり、男女和合を象徴する妹背山の入口付近に設けた⁵⁾⁵³⁾。

現在も残り、その様子を見ることができる。



図 2-88 鶴鴒石
(平成 29 年 12 月 7 日)

26) 詠和歌石（えいかせき）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島の西側に位置する。資料によっては「詠哥石」とも記される。六義園記では付近にある山部赤人にちなんだ片男波、仙禽橋、蘆辺の亭と関連し、烏帽子をかぶったような詠和歌石を「人の哥よみて居たるかたちにならん、とてなり。」と記している⁵⁾⁵³⁾。文化 10（1813）年の記録では「大石にして形は面白し」と記された¹⁸⁾。

現在も石柱とともに残る。

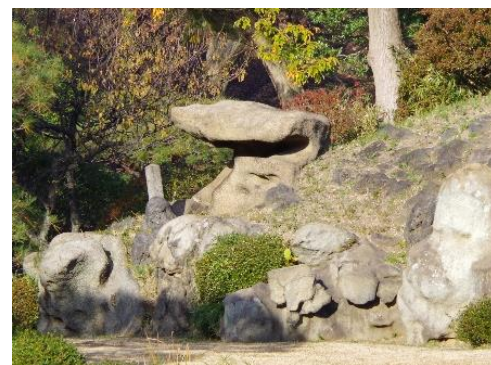


図 2-89 詠和歌石
(平成 29 年 12 月 7 日)

27) 背山（せのやま）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の中の島を構成する築山であり、和歌の浦の景を構成する重要な要素の一つである。六義園記では妹山、玉笹とともに、「いもせ山 中に生たる 玉ぎ」の一夜のへだて さもぞ露けき」と詠まれた和歌に基づいているとされる^{5) 53)}。同様に西側に隣り合うように造られた妹山と合わせて表現される「妹背山」は古今和歌集において男女の仲を象徴し、周囲には子孫繁栄のための凸型の陽石と凹型の陰石が設けられている。

平成初期まで実生の高木で覆われていたが取り除かれ、現在もその姿を見ることができる。



図 2-90 背山
(平成 29 年 12 月 7 日)

28) 妹山（いものやま）

作庭初期の六義園八十八境の一つで、東側に隣り合う背山とともに中の島を構成する築山であり、和歌の浦の景を構成する重要な要素の一つである。

平成初期まで実生の高木で覆われていたが取り除かれ、現在も本園の中央で、その姿を見ることができる。

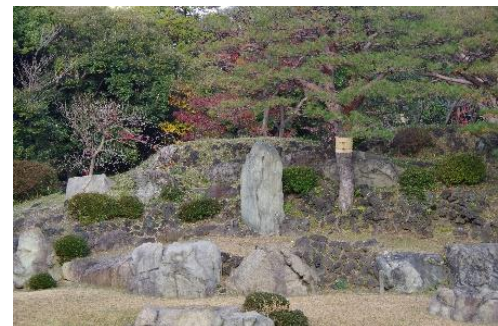


図 2-91 妹山
(平成 29 年 12 月 7 日)

29) 臥龍石（がりゅうせき）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島の南側池面に位置する。六義園記では「龍のふしたるごとくにて、水に入たるやうに見えたる石なり。」と記しているほか、扶桑名勝の中での和歌の浦の八景、玉津島の歌にある「枕頭高臥両蒼龍」という句や、現地の民が姫龍と彦龍が水中に住むことを吉とする言い習わしについても触れている^{5) 53)}。

現在も石柱とともに残る。



図 2-92 臥龍石
(平成 29 年 12 月 7 日)

30) 玉笹（たまざさ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、妹山と背山の間に位置している。六義園記では妹山及び背山の元となった和歌のうち、玉笹について「『中に生たる』といふ言葉、『へだて』といふ言葉に縁をとりて。」とあり^{5) 53)}、男女の仲を取り持つための障害として表現されている。

現在も石柱とともに残る。



図 2-93 玉笹
(平成 29 年 12 月 7 日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

31) 片男波（かたおなみ）・背松（せのまつ）

片男波は作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島の南側に位置する。六義園記ではその由来について記されていないが、「片男波」は詠和歌石、仙禽橋とともに山部赤人にちなんだ要素である^{5) 53)}。当時の地割が現在にも残り、石柱とともに当時の名残を今に伝えている。

背松もまた作庭初期の六義園八十八境の一つであり、片男波付近に位置している。六義園記ではその由来について記されていないが、妹松と対応するように、和歌の浦の池を挟んで対岸に配置されていた。

現在も付近に松があるが、背松であるかどうかは明らかでない。



図 2-94 片男波・背松
(平成 29 年 12 月 7 日)

32) 浮宝石（ふほうせき）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島の南側に位置している。六義園記では日本書紀でスサノオが眉毛から浮宝（舟）を作りだしたという一説をもとに「舟の形に似たれば、石にてもうかぶにや、とおもわれて。」と名の由来を記している^{5) 53)}。

現在も残り、その様子を見ることができる。



図 2-95 浮宝石
(平成 29 年 12 月 7 日)

33) 堅磐（かきは）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島の中央に位置している。六義園記では正面から右隣にある常磐とともに神書（神道関連の書）や「中臣祓」にも登場する永遠の繁栄を表す言葉とし、「妹背のみち、長久ならん事を祈る。」としている^{5) 53)}。

現在も石柱とともに残る。



図 2-96 堅磐
(平成 29 年 12 月 7 日)

34) 常磐（ときわ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、正面から左隣にある堅磐とともに中の島の中央に位置している。

永遠を表す言葉として設置された^{5) 53)}。

現在も石柱とともに残る。



図 2-97 常磐
(平成 29 年 12 月 7 日)

35) 詞華石（ことばのはなし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、中の島の東側に位置する。六義園記では「花のやうなる紋あり。詞のはなといふは、和哥の事なれば、和哥の浦の石なるゆへに、縁をとるなり。」と記している⁵⁾
⁵³⁾。

現在も石柱とともに残る。



図2-98 詞華石
(平成29年12月7日)

2 大泉水を囲む山辺の景観ゾーン

36) 臙の岡（おぼろのおか）

臙の岡は作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の南側に位置する。六義園記では、「玉津嶋 磯部の松の 木の間より おぼろに霞む 春の夜の月」と詠まれた和歌に基づいているとされる。また、『和哥の松原』の松、生長せば、此岡にて春の月を見んに、此哥にかなふべくや。」とも記しており⁵⁾⁵³⁾、かつて臙の岡の近傍（東側）にあった和歌松原との関連を示している。現在は築山としてその名残を見ることができる。



図2-99 臙の岡
(平成29年12月7日)

37) 白鳥関（しらとりのせき）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の南側に位置する。六義園記では、鴨長明哥集に収録された「おもふには ちぎりもなにか 朝もよひ 紀の川上の 白鳥の関」と詠まれた和歌に基づいているとされる。また、『紀の川上』の名所なり。」とも記しており⁵⁾⁵³⁾、西側近傍にある紀川上の景を構成する要素としても重要な役割を果たしていた。

文化10（1813）年の記録には「これより門構ありて南の方茶屋に至る、此所更に深山幽谷の如し。」と記され、本園の南端に茶屋があった¹⁸⁾。文化8年～天保9年（1811-1838年）頃の記録では、この茶屋は「龍華庵」と呼ばれ、市ヶ谷月桂寺の僧が住持していたほか、付近には常に閉鎖された5代将軍綱吉の御霊社があったと記されている¹⁰⁾。現在は庭園管理用区域に石柱が残るのみとなっている。



図2-100 白鳥関
(平成29年12月7日)

38) 紀川上（きのかわかみ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の南側に位置する。六義園記では、「朝もよひ きの川上を詠れば かねのみたけに 雪ふりにけり」と詠んだ和歌に基づいているとされる。また、「きの川づらより見わたして、水出る源なれば。」とも記しており^{5) 53)}、もとより水の出る源流であったことが分かる。文化8年～天保9年（1811-1838 年）頃の記録から、一時期、水が枯れていたとされている¹⁰⁾。その後、紀川上にあった拾玉渚、亀浮橋の付近が変化しているものの、現在も残る。



図2-101 紀川上
(平成29年12月7日)

39) 拾玉渚（たまひろうなぎさ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、紀川上流の下流付近に位置していた。六義園記では、「和歌の浦に みがける玉を 拾ひ置きて いにしへ今の かずを見るかな」と詠んだ和歌に基づいており、小さい洲であるとされる。また、「貫之の哥にてはなけれ共、『いにしへ今』といへる詞を、『こきん』にあてゝ、貫之にこゝろを寄せ侍る。六義の園にて、和哥のうらなれば、哥のみちの先達にこゝろをよする名所を、まうけたく侍て。」とも記しており^{5) 53)}、和歌に用いられた用語を古今和歌集とつなげ、紀貫之に心を寄せる場所を本園内に設ける意図を見ることができる。



図2-102 拾玉渚
(平成29年7月17日)

文化10（1813）年の記録では「拾玉の渚」と記され、滝の下5～7間（約9～12.6m）離れた川中にあり、丸石や平石等を飛び石のように配し、川中を歩くようなものであった¹⁸⁾。その後の詳細は明らかでなく、中島と石で出来た滝の流れに変更され、現在に至っている。

40) 水分石（みずわけいし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、紀川上の奥に位置する。六義園記では水を3つに分ける石とし、「東山殿の図にも、『水分石』といふ石あり。」と記しており、柳澤吉保が銀閣寺を造営した足利義政の影響を受けていることが分かる^{5) 53)}。文化10（1813）年の記録では同名で、「落下る飛泉この大石にあたりて左右にわかるゝ所也。」と記している¹⁸⁾。

現在も残り、その様子を見ることができる。



図2-103 水分石
(平成29年12月7日)

41) 滝見茶屋

紀川上を正面に見た左岸に位置し、岩崎家により建てられたものである。建物に関する詳細は明らかになっていない。昭和 20（1945）年に戦災により焼失したが、戦後に再建された³³⁾。

現在は休憩施設として、多くの利用者に利用されている。



図 2-104 滝見茶屋
(平成 29 年 12 月 7 日)

42) 枕流洞（まくらのほら）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、紀川上の奥に位置する。六義園記では「石のかたち、流に枕して、下に洞あり。」と記している。その名の由来は「妙寿院の集」にある同名にあり、孫楚の詞の一節「流に枕し、石に漱（くつろ）ぐ」が隠者を指すこととして、紀川上が隠者の住むところとして位置付けている^{5) 53)}。文化 10（1813）年の記録では同名で、「形くゝり枕の如し。」と記している¹⁸⁾。

現在も残り、その様子を見ることができる。



図 2-105 枕流洞
(平成 29 年 12 月 7 日)

43) 朝陽岩（あさひのいわお）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、紀川上の奥に位置する。六義園記では名の由来を、朝日にあたる所であるとともに『『あさもよひき』といふ縁なり。』と記しており、場所と「紀」にかかる枕詞の「朝もよひ」にちなんだものとされる^{5) 53)}。文化 10（1813）年の記録では「旭のいわほ」として記され、青く両面鏡のような大石だったとされる¹⁸⁾。

現在も残り、その様子を見ることができる。



図 2-106 朝陽岩
(平成 29 年 12 月 7 日)

44) 紀路遠山（きじのとおやま）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、紀川上の最奥に位置する。六義園記では「春寒み 猶ふき上の 浜風に かすみもはてぬ 紀路の遠山」と詠んだ和歌に基づいており、紀川上に遠く続く山とされている^{5) 53)}。

現在も紀川上の背景に築山として残り、石柱とともに柳澤吉保時代の様子を今に伝えている。



図 2-107 紀路遠山
(平成 29 年 12 月 7 日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

45) 尋芳径（はなとうこみち）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の南西に位置する。六義園記ではこの境について『『はなをとふ』という心なり。』と記しており、中国の朱子の漢詩の一節で「勝日尋芳泗水濱」に基づいたものである。「芳」から吉野の「吉」を連想し、吉野を詠んだ和歌に多く用いられる「尋入る」と関連づけている^{5) 53)}。文化 10（1813）年の記録では同名で「熊笹山の左の別れ路といえり。」と記されている¹⁸⁾。

現在も残り、吟花亭跡に通じる山中の景色を楽しめる。



図 2-108 尋芳径
(平成 29 年 12 月 7 日)

46) 衣手岡（ころもでのおか）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側、尋芳径付近に位置する。六義園記では「夕されば 衣手さむし みよし野ゝ よし野ゝ 山にみゆきふるらし」と詠んだ和歌に基づいており、袖のような岡と記している。尋芳径・下折峯・吟花亭・峯花園・篠下道を含む一帯に、吉野の景を表す要素の一つである^{5) 53)}。文化 10（1813）年の記録では「衣ての岡」と記され、「椎が山の南の裾通り也。」とある¹⁸⁾。

現在も下折峯とともに、尋芳径の両側に築山として残り、石柱とともに山中の景色を楽しめる。



図 2-109 衣手岡
(平成 29 年 12 月 7 日)

47) 下折峯（しおりのみね）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側、尋芳径の奥に位置する。六義園記では、新古今和歌集で西行が「吉野山 去年のしをりの 道かへて まだ見ぬかたの 花を尋ねん」と詠んだ和歌に基づいており、尋芳径・衣手岡・吟花亭・峯花園・篠下道を含む一帯に、吉野の景を表す要素の一つである^{5) 53)}。

現在も衣手岡とともに、尋芳径の両側に築山として残り、石柱とともに山中の景色を楽しめる。



図 2-110 下折峯
(平成 29 年 12 月 7 日)

48) 吟花亭（ぎんかてい）跡

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側、尋芳径・下折峯を通った先に位置する。六義園記では、楽天（白居易）の漢詩の一節で「花開催鳥吟」に基づいており、「花多き亭なれば、此詞の心をおもひやりて。」と記している。また、下折峯の項で柳澤吉保が吟花亭を「吉野の里」と名付けたくも、諱等の憚り等があり別名としたとあり、尋芳径・下折峯・衣手岡・峯花園・篠下道を含む一帯に、吉野の景を表す要素の一つである^{5) 53)}。



図2-111 吟花亭跡
(平成29年12月7日)

文化年中に跡となったと考えられ²⁹⁾、文化8（1811）から天保9（1838）年頃と見られる記録では吟花亭について「御亭の跡」として今は平らになっていると記されており¹⁰⁾、岩崎家時代に建て替えられるまで、その詳細は明らかになっていない。昭和20（1945）年に戦災により焼失し³³⁾、現在は石の基礎のみが残る。

49) 峯花園（みねのはなぞの）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側、吟花亭跡の向かいに位置する。六義園記では、常磐井入道前太政大臣が「三吉野ゝ 峯の花ぞの風吹ば ふもとに曇る 春の夜の月」と詠んだ和歌に基づいており、小さい丘の多い場所と記している。尋芳径・下折峯・衣手岡・吟花亭・篠下道を含む一帯に、吉野の景を表す要素の一つである^{5) 53)}。



図2-112 峯花園
(平成29年12月7日)

文化8（1811）から天保9（1838）年頃と見られる記録では、篠下道より掛雲峯にかけての峯花園周辺はカエデ等の紅葉木が多く、梅の花が見られた。当時より昔は桜が多かったとされる¹⁰⁾。

現在はツツジ類が多く植えられ、残された石柱がその名残を今に伝えている。

50) 篠下道（すすのしたみち）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側に位置する。六義園記では、覚誉法親王が「吉野山 花のためにも 尋ねばや まだ分初ぬ ずづの下みち」「ちぎりあらば またや尋ん 吉野山 露わけわぶる ずづの下みち」と詠んだ2首の和歌に基づいており、尋芳径・下折峯・衣手岡・吟花亭・峯花園を含む一帯に、吉野の景を表す要素の一つである^{5) 53)}。文化10（1813）年の記録では「すゝの下道」と記され、「花まき山にそいて西北の山道をいえり。」としている¹⁸⁾。



図2-113 篠下道
(平成29年12月7日)

現在も花垣山に通じる園路として残り、利用されている。

51) 藻塩木道（もしおぎのみち）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側に位置する。六義園記では「ちぎり置し 契りの上に 添をかん 和哥の浦路の あまのもしほぎ」と詠んだ和歌に基づいており、「和哥の浦、吹上の浜のあまの風景なり。」と記している^{5) 53)}。文化 10 (1813) 年の記録では「もしほ木の道」と記され、坂路であるとしている¹⁸⁾。

現在も吹上浜に通じる園路として残り、利用されている。



図 2-114 藻塩木道
(平成 29 年 12 月 7 日)

52) 木枯峯（こがらしのみね）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側、藻塩木道付近に位置する。六義園記では藤原家隆が「秋の夜を 吹上の峯の 木枯に よこ雲しらぬ 山の端の月」と詠んだ和歌に基づいており、『時雨の岡』の対なり。」と記してあるように^{5) 53)}、時雨岡と道を隔てて対となるように設けられた吹上に関連する要素の一つである。文化 10 (1813) 年の記録では木枯峯について記されておらず¹⁸⁾、その後の詳細は明らかになっていない。

現在も時雨岡とともに築山として残り、石柱とともに今に伝えている。



図 2-115 木枯峯
(平成 29 年 12 月 7 日)

53) 水香江（すいこうのえ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側に位置する。六義園記では、杜子美の漢詩の一節「芙荷一水香」、李白の漢詩の一節「風動荷華水殿香」、華嚴経の一節「香水海中有大蓮花」に基づいており^{5) 53)}、芙蓉橋と同様に蓮に関連する要素である。文化 10 (1813) 年の記録では水香江の名はないが、芙蓉橋から西の汀を「水音の丘」と記している¹⁸⁾。文化 8 (1811) から天保 9 (1838) 年頃と見られる記録では、1つの池と記され、昔は蓮が多くあったとされている¹⁰⁾。

明治 32 (1899) 年時点ではまだ水をたたえていたが⁵⁸⁾、大正年間頃に大泉水の浚渫による泥土で水面が埋め立てられ⁴⁶⁾、現在のような涸池となった。



図 2-116 水香江
(平成 29 年 12 月 7 日)

54) 吹上峯（ふきあげのみね）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側に位置する。六義園記ではその由来について記されていないが、藻塩木道・木枯峯・吹上浜・吹上松・吹上小野を含む一帯を吹上の景として構成する重要な要素の一つである^{5) 53)}。

現在も築山として残り、水香江周辺の山の景と吹上浜一帯の景を分ける存在となっている。



図 2-117 吹上峯
(平成 29 年 12 月 7 日)

55) 芙蓉橋（ふようのはし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側に位置する。六義園記ではその由来について「芙蓉は、蓮の事なり。蓮池の橋なれば。」と記している^{5) 53)}。藻塩木道・木枯峯・吹上浜・吹上松・吹上小野を含む一帯を吹上の景として構成する重要な要素の一つである。文化 10 (1813) 年の記録では、同名で長さ3間（約 5.4m）ほどの清流に架かる板橋であったと記されている¹⁸⁾。

その後の詳細は明らかでないが、現在は涸池となった水香江に架かる小さな木橋となっている。



図 2-118 芙蓉橋
(平成 29 年 12 月 7 日)

56) 座禅石（ざぜんせき）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側、つつじ茶屋付近に位置する。六義園記では名の由来を、元の石の形や異国や他所で座禅にちなんだ石があることに加え、「高山の麓にて、静なる川の流に臨たる景地をおもひやりて。」と記しており、禅寺や高山寺等の景を表している^{5) 53)}。柳澤吉保時代は傍らに松が植わっていたが⁵⁹⁾、岩崎家時代にこの石の傍につつじ茶屋が建てられた²⁴⁾。

現在も石柱とともに残る。



図 2-119 座禅石
(平成 29 年 12 月 7 日)

57) 霞亭坂（かすまぬさか）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側、つつじ茶屋付近に位置する。六義園記では「藤代の 三坂をこえて 見わたせば かすみもやらぬ 吹上のはま」と詠んだ和歌に基づいており、『木枯の峯』の哥、『よこ雲しらぬ』ころもあり。藤代にも、ちかし、『霞入江』に対して。」と記してあるように^{5) 53)}、木枯峯、吹上浜、霞入江の場所と、川を挟んで対岸にある藤代峠との関係をつなぐ要素である。文化 10（1813）年の記録では名称のみ登場するが¹⁸⁾、その後の詳細は明らかになっていない。

現在もつつじ茶屋の建つ築山に登る園路として残り、石柱とともに今に伝えている。



図 2-120 霞亭坂
(平成 29 年 12 月 7 日)

58) 不知汐路（しらぬしおじ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側に位置する、紀川につながる流れである。六義園記では「和歌の浦 知らぬ汐路に こぎ出てみにあまる迄 月を見るかな」と詠んだ和歌に基づいており、「船の行方のしれぬやうに覚ゆれば。」と記してあり、和歌の浦、吉野川を表す紀川、吉野に関する和歌で多用される「もろこし（唐土）」がこの要素に込められており、遠い世界への船出を「行方の知れぬ」として表したという説もある^{5) 53)}。文化 10（1813）年の記録では不知汐路について記されておらず¹⁸⁾、その後の詳細は明らかになっていない。現在も石柱が付近に残っており、作庭当時の図絵と同じ地割が保たれている。



図 2-121 不知汐路
(平成 29 年 12 月 7 日)

59) 山陰橋（やまかげのはし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、剡溪流に架かる西側の橋である。六義園記では「山陰のはしなるによりて。」とあり^{5) 53)}、欄干のついた木橋であった⁵⁹⁾。文化 10（1813）年の記録では「山陰の橋」と記され、長さ 5 間（約 9m）の土橋とあり、橋の周辺は深山幽谷の風情であった¹⁸⁾。現在も土橋として残り、平成 25（2013）年に改修工事が行われた。



図 2-122 山陰橋
(平成 29 年 12 月 7 日)

60) 剡溪流（ぜんけいのながれ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北側に位置する、不知汐路の北奥にある流れである。六義園記では和歌の題材にも用いられる中国の王子猷の故事に由来し、「名高きふる事なれば、哥にもよむべし。『山陰橋』をかけたる流なれば。また、『剡溪の藤』という事も、思ひ合て」と記しており、和歌と中国との関連を表している⁵⁾⁵³⁾。文化10(1813)年の記録では「剡溪の流」と記され、東西長さ3町（約100m）とあり、葭の間々にカキツバタ、オモダカ、コウホネ、フトイ等の水生植物のみ生えた見所であった¹⁸⁾。

現在、水生植物は見られないものの、石柱が残り、作庭当時の図絵と同じ地割が保たれている。



図2-123 剡溪流
(平成29年12月7日)

61) 蛛道（ささがにのみち）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北側、剡溪流に沿う道である。六義園記では『我せこ』の御哥に、もとづく。」としており、「我せこ」は玉津島明神である衣通姫の「我がせこが 来べき宵なり ささがにの 蜘蛛のふるまひ かねてしるしも」と詠んだ和歌を指している。また、「蛛の糸など、ほそき事に用ふれば、道の名とせり。又、哥のみちの、たえせぬことに寄せて、読たる哥もあれば」と記してあるように⁵⁾⁵³⁾、細くも丈夫な蜘蛛の糸を、和歌の道が永遠に絶えないことを祈った和歌と同様の願いを込めたものである。文化10(1813)年の記録では「さゝかにの道」として登場するが¹⁸⁾、その後の詳細は明らかになっていない。現在も石柱とともに今に残っている。



図2-124 蛛道
(平成29年12月7日)

62) つつじ茶屋

本園の北西側、座禅石付近に位置し、岩崎家により建てられたものである。柱がツツジの枝幹で造られた茅葺の東屋で、昭和20(1945)年の戦災にも耐え、現在に残る貴重な建築物である²⁴⁾。

現在は休憩施設として、多くの利用者に利用されている。



図2-125 つつじ茶屋
(平成29年12月7日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

63) 藤浪橋（ふじなみのはし）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北側、剡溪流に架かる東側の橋である。六義園記では「『藤の里』より渡る橋なり。『藤波』の二字、『我宿の池の藤波』など、『古今』にもよめる言葉なり。」とあり⁵⁾⁵³⁾、欄干のついた木橋であった。また、付近に藤棚が設けられていた⁵⁹⁾。文化 10 (1813) 年の記録では、同名で長さ 5 間 (約 9m) ほどの土橋とあり、川向うに幅 9 尺 (約 2.7m) の藤棚があったとされる¹⁸⁾。

現在も土橋として残り、平成 20 (2008) 年に改修工事が行われた。



図 2-126 藤浪橋
(平成 29 年 12 月 7 日)

64) 老ヶ峯（おいがみね）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北側に位置する。六義園記では和歌の浦、妹山・背山、妹松・背松と合わせて、老若男女すべての人間を表している。また、千載集や新続古今などの序にある「此境に來りと來り、此代に生れと生れたる人、和哥を玩ばずといふ事なき。」という意を含むと記され⁵⁾⁵³⁾、他の要素と合わせて本園に訪れるすべての者に和歌を詠むことを要請する意図が含まれている⁵²⁾。

現在も石柱とともに築山として残る。



図 2-127 老ヶ峯
(平成 29 年 12 月 7 日)

65) 藤代峠（ふじしろとうげ）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側に位置する。六義園記では、紀国 (和歌山) にある四方を見下ろす景地で、無双の景であるとしている。また、和歌では「藤代の三坂」として詠まれている⁵⁾⁵³⁾。文化 10 (1813) 年の記録では「富士見山」として記され、頂上までおよそ 56 間 (約 10.2m) あり、そこから眺める本園を「寂寛たる深山に遊ぶが如し。」と記している¹⁸⁾。

頂上からは大泉水を正面に、右手に富士山と左手に筑波山を眺めることができた。

現在も石柱とともに本園で最も標高の高い築山として残り、その峠道も園路として利用されている。頂上には腰掛けの石が残り、「五代将軍腰掛け石」として伝わっている⁶⁰⁾。



図 2-128 藤代峠
(平成 29 年 12 月 7 日)

3 正門及び染井門周辺の景観ゾーン

66) 千年坂（ちとせのさか）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北側、老ヶ峯を上る坂である。六義園記では千載集の「ゆくとしは 浪とともにや かへるらん おもがはりせぬ わかの浦かな」と詠んだ和歌に基づく^{5) 53)}とされる。

現在も老ヶ峯とともに残る。



図2-129 千年坂
(平成29年12月7日)

67) 過勝峯（すぎがてのみね）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北東側に位置する。六義園記では「すぎがてに 見れどもあかぬ 玉津嶋 むべこそ神の 心とめけれ」と詠んだ和歌に基づく^{5) 53)}とされ、道のほとりの峯の景に通り過ぎず立ち止まることを意図した。

現在も築山として残る。



図2-130 過勝峯
(平成29年12月7日)

68) 千里場（せんりじょう）

作庭初期の庭園要素の一つであり、本園の北東側に位置する。六義園記では中国の杜子美の漢詩の一節「千里奮霜蹄」に基づく^{5) 53)}とされ、馬がよく進む場所であることを表した⁵¹⁾。戦中は薪として供出するため、付近の樹木が伐採された。

現在は外周堀付近の直線状の歩道空間として残る。

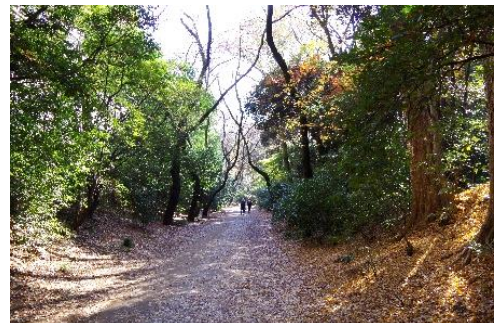


図2-131 千里場
(平成29年12月7日)

69) 名古屋（なもふるやま）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北東側に位置する。六義園記では玉葉和歌集での嵯峨院による賀歌「三代までに 古今の 名もふりぬ ひかりをみがけ 玉津嶋姫」と詠んだ和歌に基づく^{5) 53)}とされ、新玉松に対比する存在とされる。

現在も築山として残る。



図2-132 名古屋
(平成29年12月7日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

70) 藐姑射山（はこやのやま）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の東側、仙禽橋正面に位置する築山である。六義園記では「曇りなき はこやの山の 月影に ひかりを そへよ 玉津嶋姫」と詠んだ和歌に基づく⁵⁾とされ、和歌の浦との関連を表している⁵⁾⁵³⁾。

文化10(1813)年の記録には記されておらず¹⁸⁾、その後の詳細は明らかでない。

現在も築山として、石柱とともに当時の名残を今に伝えている。



図2-133 藐姑射山
(平成29年12月7日)

71) 遊藝門（ゆきのもん）跡

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の入口より北側に進み、しだれ桜の正面から右側の付近にあったとされる。六義園記では論語の一節「志於道、拠於徳、依仁、遊於芸」、朱子の説「道者当然之理、芸者道之所寓」とを挙げ、「道と芸と二つなし。此園に遊ぶ人は、皆、道の遊びにして、治れる世を楽しむ音を、三十一字につらぬるなるべし。」と儒教を取り入れつつ、泰平の世の中で、和歌を詠んで楽しむ世界の入口としている⁵⁾⁵³⁾。柳澤吉保時代は細い木で簡易に組まれた関所の門のような造りであった⁵⁷⁾。

文化10(1813)年の記録には記されておらず¹⁸⁾、その後なくなるまでの詳細は明らかでない。現在は石柱のみ残り、その名残を今に伝えている。



図2-134 遊藝門跡
(平成29年12月7日)

72) 兼言道（かねことのみち）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の東側、新玉松跡に通じる道である。六義園記では続古今和歌集の「祈り置きし 我兼言の いやましに さかゆく御代は 神ぞしるらん」と詠んだ和歌に基づいており、玉津島神社へ参じる道であり通る人々が祈る様を表している⁵⁾⁵³⁾。

文化10(1813)年の記録では「かね言の道」として登場するが¹⁸⁾、その後の詳細は明らかになっていない。現在も園路として残っている。



図2-135 兼言道
(平成29年12月7日)

73) 内庭大門

本園の入口より西側に進んだところに位置する。岩崎家時代に建てられた門であり、この門の奥のしだれ桜のある付近には当時、岩崎家の御殿があった。御殿があった当時にも大きな門が設けられていたが、現在の門は東京市が設置したものである。



図 2-136 内庭大門
(平成 29 年 12 月 7 日)

4 外周緩衝植栽ゾーン

74) 掛雲峯（くもかかるみね）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の西側角部に位置する。六義園記では「桜の咲たるを、雲のかゝるによそへたる哥ども、多し。」と記している^{5) 53)}。吟花亭より、遠景に望むことができ、裾の方には花木が多く植えられていた。

文化 10 (1813) 年の記録には記されておらず¹⁸⁾、その後なくなるまでの詳細は明らかでない。現在も築山として残る。



図 2-137 掛雲峯
(平成 29 年 12 月 7 日)

75) 花垣山（はなかきやま）

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北西側外周部に位置する。六義園記では本園を囲う山とし、権中納言公雄の続後拾遺で「神垣は 花の白ゆふ かほるらし 吉野ゝ宮の 春の手向に」と詠んだ和歌に基づいており、吉野山との関連を表している^{5) 53)}。柳澤吉保時代は花木が植えられていた⁶¹⁾。

文化 10 (1813) 年の記録には「花まき山」と記され、一面映日紅が植わっていた¹⁸⁾。その後映日紅がなくなるまでの詳細は明らかでない。現在も築山として残る。



図 2-138 花垣山
(平成 29 年 12 月 7 日)

76) 藤里（ふじのさと）跡

作庭初期の六義園八十八境の一つであり、本園の北東側外周部に位置する。六義園記では藤棚の近くにあったことや玉津島明神である衣通姫が藤原京に住んでいたことから名付けられた。また、「頼かな 我が藤はらの 都より 跡たれ初る 玉津嶋姫」と詠んだ和歌に基づいており、玉津島との関連を表している^{5) 53)}。柳澤吉保時代は垣で囲われ、いくつかの建物があった⁶¹⁾。



図 2-139 藤里跡
(平成 29 年 12 月 7 日)

文化 10 (1813) 年の記録には、同名で田舎風の生垣と突上げの枝折戸があり、藁葺屋根の大きさが6間半に2間半 (11m×5m) ほどあったと記されている¹⁸⁾、また、同時期またはそれ以後と見られる記録では、農家のような「田舎家」と称する建物があり、中は畳が敷かれ、囲炉裏には自在鍵と呼ばれるものが掛けられていた¹⁰⁾。

その後の詳細は不明であるが、現在は植栽に覆われた草地となっている。

第Ⅱ章の記載に用いた文献

- 1) 常憲院殿御實記. 年代不詳. 東京市. 東京市史稿遊園篇第1所収. 昭和4(1929)年. 国立国会図書館所蔵
- 2) 屋敷書拔 甲第1-7冊. 元禄4~9(1691-1696)年. 国立国会図書館所蔵
- 3) 御府内場末往還其外沿革圖書貳拾壹亨. 安政3(1856)年. 国立国会図書館所蔵
- 4) 東京市. 本郷区史. 昭和12(1937)年. 文京区立真砂中央図書館所蔵
- 5) 六義園記・『楽只堂年録』第108巻. 元禄5(1702)年. 国立国会図書館所蔵
- 6) 藤井英二郎. 六義園の成立に関する史的考察 その1: 吉保引退までの時代. 昭和61(1986)年. 千葉大園学報所収
- 7) 藤井英二郎. 六義園の成立に関する史的考察 その2: 吉保退隠前後の庭の変化. 平成3(1991)年. 千葉大園学報所収
- 8) 正親町町子. 松陰日記. 元禄一宝永年間. 柳沢文庫所蔵
- 9) 六義園全図並八景十二境和歌. 宝暦年間(1751-1764). 国立国会図書館所蔵
- 10) 駒籠別墅の記. 文化8(1811)一天保9(1838)年. 我自利我江戸名園記所収. 国立国会図書館所蔵
- 11) 文京区役所. 文京区史. 昭和43(1968)年. 文京区立真砂中央図書館所蔵
- 12) 島内景二. 北村季吟. 平成16(2004)年. 国立国会図書館所蔵
- 13) 寛政重修諸家譜巻第百六十三. 年代不詳. 国立国会図書館所蔵
- 14) 千川上水路図解説. 昭和61(1986)年. 文京区立真砂中央図書館所蔵
- 15) 柳澤信鴻. 宴遊日記. 安永2(1773)一天明5(1875)年. 国立国会図書館所蔵
- 16) 小野佐和子. 柳澤信鴻の隠居所としての六義園. 平成11(1999)年. ランドスケープ研究62(5)所収
- 17) 新脩六義園碑. 文化6(1809)年頃. 六義園内
- 18) 十方庵敬順. 遊歴雑記. 文化10(1813)年. 国立国会図書館所蔵
- 19) 東京市公報. 昭和13(1938)年4月19日. 東京都公文書館所蔵
- 20) 小野佐和子. 六義園に見る贈答品としての庭の産物. 平成14(2002)年. ランドスケープ研究65(5)所収
- 21) 小野佐和子. 六義園に見る安永・天明期の「庭見物」. 平成12(2000)年. ランドスケープ研究63(5)所収
- 22) 岩崎久弥. 昭和36(1961)年. 文京区立真砂中央図書館所蔵
- 23) 菊池寿人. 行々坊行脚記. 昭和12(1937)年. 国立国会図書館所蔵
- 24) 森守. 六義園(第四版). 平成16(2004)年. 公益財団法人東京都公園協会
- 25) 東京日日新聞. 明治30(1897)年5月22日. 新聞集成明治編年史第十巻所収. 国立国会図書館所蔵
- 26) 岩崎久彌. 寄附願. 昭和13(1938)年4月12日. 東京都公文書館所蔵
- 27) 東京市役所. 六義園. 昭和13(1938)年. 国立国会図書館所蔵
- 28) 東京市公文書. 第百五十五號 寄付受領ノ件. 東京市. 昭和13(1938)年. 東京都公文書館所蔵
- 29) 名苑六義園. 「東京市町会時報3(3)」所収. 東京市. 昭和13(1938)年. 国立国会図書館所蔵
- 30) 東京市公報. 昭和13(1938)年10月15日. 東京都資料
- 31) 東京朝日新聞. 昭和13(1938)年4月16日. 東京朝日新聞縮刷版昭和13年4月号所収. 国立国会図書館所蔵
- 32) 六義園管理日誌. 昭和19(1944). 昭和20(1945)年. 六義園(第四版)所収
- 33) 都市公園台帳. 東京都資料
- 34) 園内井戸設置の経緯・地役権・六義園附属地. 東京都資料
- 35) 読売新聞. 昭和51(1976)年8月17日. 週刊読売 = The Yomiuri weekly 所収. 国立国会図書館所蔵
- 36) 山本三郎. 六義園の江戸園芸ツツジと再生プロジェクト. 平成20(2008)年. 都市公園(181)2008.7所収. 国立国会図書館所蔵
- 37) シンガポール国賓来園. 写真. 昭和43(1968)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 38) ソ連知ア団来園. 写真. 昭和45(1970)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 39) アゼルバイジャン共和国教育大臣来園. 写真. 昭和50(1975)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 40) カリフォルニア州ラメサ市チェアマン来園. 写真. 昭和51(1976)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 41) モンゴル国大使来園. 写真. 昭和52(1977)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 42) 中国大使来園. 写真. 昭和52(1977)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 43) ソ連国シュワルナゼ外相来園. 写真. 昭和61(1986)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 44) 「都民の日」友好交歓会. 写真. 昭和57(1982)年. 六義園サービスセンター所蔵
- 45) 駒込・巣鴨の園芸史料. 豊島区立郷土博物館. 昭和60(1985)年. 国立国会図書館所蔵
- 46) 山崎敬・山崎富佐子. ツツジ栽培の歴史. 昭和51(1976)年. ガーデンシリーズ「ツツジその種類と栽培」所収. 国立国会図書館所蔵
- 47) 豊島区地域地図 第6集近代(千川上水編). 平成5(1993)年. 文京区立真砂中央図書館所蔵
- 48) 豊島区史通史編2. 昭和58(1983)年. 文京区立真砂中央図書館所蔵
- 49) 大和郷会史編纂委員会. 大和郷遠近物語: 大和郷90年のあゆみ: 社団法人設立九十周年記念誌. 平成27(2015)年. 国立国会図書館所蔵
- 50) 東京の公園140年. 平成28年1月. 東京都
- 51) 藤原芳尋. 六義園図絵巻. 文化7(1810)年以後. 山梨県立博物館所蔵
- 52) 六義園圖. 元禄15(1702)年. 楽只堂年録第108巻所収. 柳沢文庫所蔵
- 53) 島内景二. 『六義園記』注解. 平成21(2009)年. 和歌山県立図書館所蔵
- 54) 茶室由来. 東京都資料
- 55) 岩崎氏染井別邸実測図. 明治32(1899)年. 東京大学駒場図書館所蔵

東京都における文化財庭園の保存活用計画（六義園）

- 56) 六義園平面図．昭和 13（1938）年．東京都資料
- 57) 狩野常信（養朴）．六義園絵巻（上巻）．元禄年間（1688～1704）．国立国会図書館所蔵
- 58) 珠光庵．六義園物語（上）．昭和 13（1938）年．「庭園 20（6）」所収．国立国会図書館所蔵
- 59) 狩野岑信．六義園絵巻（下巻）．元禄年間（1688～1704）．国立国会図書館所蔵
- 60) 珠光庵．六義園物語（下）．昭和 13（1938）年．「庭園 20（7）」所収．国立国会図書館所蔵
- 61) 狩野周信．六義園絵巻（中巻）．元禄年間（1688～1704）．国立国会図書館所蔵

※上記の出典文献は全てが本文中に記されているものではない。